

# 源氏物語

澁標

紫式部

青空文庫



みをつくし逢あはんと祈るみてぐらもわ

れのみ神にたてまつるらん (晶子)

須磨すまの夜の源氏の夢にまざまざとお姿をお現わしになって以来、  
 父帝のことで痛心していた源氏は、帰京ができた今日になってそ  
 の御菩提ごぼだいを早く弔ういたいと仕度したくをしていた。そして十月に法華ほけきよ  
 経うの八講が催されたのである。参列者の多く集まって来ること  
 は昔のそうした場合のとおりであった。今日も重く煩わづつておいで  
 になる太后は、その中でも源氏を不運に落としおおせなかつた  
 ことを口惜くちおしく思おぼ召しめすのであつたが、帝みかどは院の御遺言をお思い

になつて、当時も報いが御自身の上へ落ちてくるような恐れをお感じになつたのであるから、このごろはお心持ちがきわめて明るおなりあそばされた。時々はげしくお煩いになつた御眼疾も快くおなりになつたのであるが、短命でお終わりになるような予感があつてお心細いためによく源氏をお召しになつた。政治についても隔てのない進言をお聞きになることができて、一般の人も源氏の意見が多く採用される宮廷の現状を喜んでいた。

帝は近く御遜位ごそんいの思召おぼしめがあるのであるが、尚ないしのかみ侍がたよがたよりにないふうに見えるのを憐あわれに思召した。

「大臣は亡なくなるし、大宮も始終お悪いのに、私さえも余命がないような気がしているのだから、だれの保護も受けられないあな

たは、孤独になつてどうなるだろうと心配する。初めからあなたの愛はほかの人に向かつていて、私を何とも思っていないのだが、私はだれよりもあなたが好きなのだから、あなたのことばかりがこんな時にも思われる。私よりも優越者がまたあなたと恋愛生活をして、私ほどにはあなたを思つてはくれないことはないかと、私はそんなことまでも考えてあなたのために泣かれるのだ」

帝は泣いておいでになつた。羞恥しゆうちに頬ほおを染めているためにいつそうはなやかに、愛あい嬌きやうがこぼれるように見える尚侍も涙を流しているのを御覧になると、どんな罪も許すに余りあるように思召されて、御愛情がそのほうへ傾くばかりであつた。

「なぜあなたに子供ができないのだろう。残念だね。前生の縁の

深い人とあなたの中にはすぐにまたその悦よろこびをする日もあるだろうと思うとくやしい。それでも気の毒だね、親王を生むのでないから」

こんな未来のことまでも仰せになるので、恥ずかしい心がしまいには悲しくばかりなつた。帝は御容姿もおきれいで、深く尚侍をお愛しになる御心は年月とともに顕著になるのを、尚侍は知つていて、源氏はすぐれた男であるが、自分を思う愛はこれほどのものでなかつたということもようやく悟ることができてきては、若い無分別さからあの大事件までも引き起こし、自分の名誉を傷つけたことはもとより、あの人にも苦勞をさせることになつたとも思われて、それも皆自分が薄はっこう倖な女だからであるとも悲しん

でいた。

翌年の二月に東宮の御元服があつた。十二でおありになるのであるが、御年齢のわりには御<sup>おんおとな</sup>大人らしくて、おきれいで、ただ源氏の大納言の顔が二つできたようにお見えになつた。まぶしいほどの美を備えておいでになるのを、世間ではおほめしているが、母宮はそれを人知れず苦勞にしておいでになつた。帝も東宮のごりっぱでおありになることに御満足をあそばして御即位後のことをなつかしい御様子でお教えあそばした。

この同じ月の二十幾日に讓位のことが行なわれた。太后はお驚きになつた。

「ふがいなく思召すでしょうが、私はこうして静かにあなたへ御

孝養がしたいのです」

と帝はお慰めになつたのであつた。東宮には承香殿じょうきょうでんの女に御よごのお生みした皇子がお立ちになつた。

すべてのことに新しい御代みよの光の見える日になつた。見聞きする眼めに耳にはなやかな気分の味わわれることが多かつた。源氏の大納言は内大臣になつた。左右の大臣の席がふさがつていたからである。そして摂政せつしょうにこの人がなることも当然のことと思われていたが、

「私はそんな忙しい職に堪えられない」

と言つて、致仕ちしの左大臣に摂政を譲つた。

「私は病気によつていったん職をお返しした人間なのですから、



今日はまして年も老いてしまったし、そうした重任に当たることなどはだめです」

と大臣は言つて引き受けない。

「支那でも政界の混沌こんとんとしてゐる時代は退しりぞいて隠者になつてゐる人も治世の君がお決まりになれば、白髪も恥じずお仕えに出て来るような人をほんとうの聖人だと言つてほめています。御病気で御辞退になつた位を次の天子の御代に改めて頂ちようだい戴だいすること  
はさしつかえがありませんよ」

と源氏も、公人として私人として忠告した。大臣も断わり切れずに太政大臣になつた。年は六十三であつた。事實は先朝に権力をふるつた人たちに飽き足りないところがあつて引きこもつてい

たのであるから、この人に栄えの春がまわって来たわけである。一時不遇なように見えた子息たちも浮かび出たようである。その中でも宰相中将は権中納言になった。四の君が生んだ今年十二になる姫君を早くから後宮に擬して中納言は大事に育てていた。以前二条の院につれられて来て高砂たかさごを歌った子も元服させて幸福な家庭を中納言は持っていた。腹々に生まれた子供が多くて一族がにぎやかであるのを源氏はうらやましく思っていた。太政大臣家で育てられていた源氏の子はだれよりも美しい子供で、御所へも東宮へもてんじょうわらわ殿上童として出入りしているのである。源氏の葵夫人あおいの死んだことを、父母はまたこの栄えゆく春に悲しんだ。しかしすべてが昔の婿の源氏によってもたらされた光明であつて、

何年かの暗い影が源氏のためにこの家から取り去られたのである。源氏は今も昔のとおりに老夫妻に好意を持っていて何かの場合によく訪ねて行った。若君の乳母めのとそのほかの女房も長い間そのままに勤めている者に、厚く酬むくいてやることも源氏は忘れなかった。幸せ者が多くできたわけである。二条の院でもそのとおりに、主人を変えようとしたわけでもなしなかつた女房を源氏は好遇した。また中將とか、中務なかつかさとかいう愛人関係であつた人たちにも、多年の孤独が慰むるに足るほどの愛撫あいぶが分かたれねばならないのであつたら、暇がなくて外歩きも源氏はしなかつた。二条の院の東に隣つた邸やしきは院の御遺産で源氏の所有になつているのをこのごろ源氏は新しく改築させていた。花散里はなちるさとなどという恋人たちを住ませる

ための設計をして造られているのである。

源氏は明石あかしの君の妊娠していたことを思つて、始終氣にかけているのであつたが、公私の事の多さに、使いを出して尋ねることもできない。三月の初めにこのごろが産期になるはずであると思ふと哀れな気がして使いをやつた。

「先月の十六日に女のお子様がお生まれになりました」

という報せしらを聞いた源氏は愛人によつてはじめての女の子を得た喜びを深く感じた。なぜ京へ呼んで産をさせなかつたかと残念であつた。源氏の運勢を占つて、子は三人で、帝みかどと后きさきが生まれる、いちばん劣つた運命の子は太政大臣で、人臣の位をきわめるであろう、その中のいちばん低い女が女の子の母になるであろうと言

われた。また源氏が人臣として最高の位置を占めることも言われてあつたので、それは有名な相そうにん人たちの言葉が皆一致するところであつたが、逆境にいた何年間はそんなことも心に否定するほかはなかつたのである。当帝が即位されたことは源氏にうれしかつたが、自身の上に高御座たかみくらの榮譽を希ねがわないことは少年の日と少しも異なつていなかつた。あるまじいことと思つている。多くの皇子たちの中にすぐれてお愛しになつた父帝が人臣の列に自分をお置きになつた御精神を思うと、自分の運と天位とは別なものであると思う源氏であつた。源氏は相人の言葉のよく合う実証として、今帝の御即位が思われた。后きさきが一人自分から生まれるということに明石の報しらせが符合することから、住すみよし吉の神の庇護ひごによ

つてあの人も後の母になる運命から、父の入道が自然片寄った婿  
選びに身命を打ち込むほどの狂態も見せたのであろう。後の位に  
なるべき人を田舎いなかで生まれさせたのはもつたない気の毒なこと  
であると源氏は思つて、しばらくすれば京へ呼ぼうと思つて、東  
の院の建築を急がせていた。明石のような田舎に相当な乳母めのとがあ  
りえようとは思われないので、父帝の女房をしていた宣旨せんじとい  
女の娘で父は宮内卿宰相くないきようだった人であつたが、母にも死に別れ、  
寂しい生活をするうちに恋愛関係から子供を生んだという話を近  
ごろ源氏は聞き、その噂うわさを伝えた人を呼び出して、宰相の娘に、  
源氏の姫君の乳母として明石へ赴おもむくことの交渉を始めさせた。こ  
の女はまだ若くて無邪気な性質から、寂しい荒あばら屋で物思いをば

かりして暮らす朝夕の生活に飽いていて、深くも考えずに、源氏の縁のかかった所に生活のできることでよいこともないようにならなから焦こがれていて、すぐに承諾して来た。源氏は田舎いなか下りをしてくれる宰相の娘を哀れに思つて、いろいろと出立の用意をしてやっていた。

外出したついでに源氏はそつとわが子の新しい乳母の家へ寄つた。快諾を伝えてもらったのであるが、なお女はどうしようかと煩悶はんもんしていた所へ源氏みずからが来てくれたので、それで旅に出る心も慰んで、あきらめもついた。

「御意のとおりにいたします」

と言っていた。ちようど吉日でもあつたのですぐに立たせるこ

とに源氏はした。

「同情がないようだけれど、私は将来に特別な考えもある子なのだからね、それに私も経験して来た土地の生活だから、そう思つてまあ初めだけしばらく我慢をすれば馴なれてしまふよ」

と源氏は明石の入道家のことをくわしく話して聞かせた。母といつしよに父帝のおそばに来ていたこともあつて、時々は見た顔であつたが、以前に比べると容ようぼう貌が衰えていた。家の様子などもずいぶんひどい荒れ方になつてゐる。さすがに広いだけは広いが気味悪く思われるほど木なども繁しげりほうだいになつていて、こんな家にどうして暮らしてきたかと思われるほどである。若やかで美しいたちの女であつたから、源氏が戯じょうだん談を言つたりする



のにもおもしろい相手であった。

「私は取り返したい気がする。遠くへなどおまえをやりたくない。どう」

と言われて、直接源氏のそばで使われる身になれたなら、過去のどんな不幸も忘れることができるであろうと、物哀れな気持ちに女はなった。

「かねてより隔てぬ中とならばねど別れは惜しきものにぞありける

いっしょに行こうかね」

と源氏が言うと、女は笑つて、

うちつけの別れを惜しむかごとにて思はん方に慕ひやはせぬ

と冷やかしました。

京の間だけは車でやった。親しい侍を一人つけて、あくまでも秘密のうちに乳母めのとは送られたのである。守り刀よりの姫君の物、若い母親への多くの贈り物等が乳母に託されたのであった。乳母にも十分の金品が支給されてあった。源氏は入道がどんなに孫を大事がっていることであろうと、いろいろな場合を想像すること  
で微笑がされた。母になった恋人も哀れに思いやられた。このご

ろの源氏の心は明石の浦へ傾き尽くしていた。手紙にも姫君を粗略にせぬようと繰り返し返し繰り返しいまし誠めてあつた。

いつしかも袖そでうちかけんをとめ子が世をへて撫なでん岩のおひ  
さき

こんな歌も送つたのである。摂津の国くにざかい境までは船で、それからは馬に乗って乳母は明石へ着いた。入道は非常に喜んでこの一行を受け取つた。感激して京のほうを拝んだほどである。そしていよいよ姫君は尊いものに思われた。おそろしいほどたいせつなものに思われた。乳母が小さい姫君の美しい顔を見て、そうめい聡明

な源氏が将来を思つて大事にするのであると言つたことはもつともなことであると思つた。来る途中で心細いように、恐ろしいように思つた旅の苦痛などもこれによつて忘れてしまうことができた。非常にかわいく思つて乳母は幼い姫君を扱つた。若い母は幾月かの連続した物思いのために衰弱したからだで出産をして、なお命が続くものとも思つていなかったが、この時に見せられた源氏の至誠にはおのずから慰められて、力もついていくようであった。送つて来た侍に対しても入道は心をこめた歓待をした。あまり丁寧な待遇に侍は困つて、

「こちらの御様子を聞こうとお待ちになつていらつしやるでしょうから早く帰京いたしませんと」

とも言うのであつた。明石の君は感想を少し書いて、

一人して撫なづるは袖そでのほどなきに覆おほふばかりの蔭かげをしぞ待つ

と歌も添えて来た。怪しいほど源氏は明石の子が心にかかつて、見たくてならぬ気がした。夫人には明石の話をあまりしないのであるが、ほかから聞こえて来て不快にさせてはと思つて、源氏は明石の君の出産の話をした。

「人生は意地の悪いものですね。そうありたいと思うあなたにはできそうでなくて、そんな所に子が生まれるなどは。しかも女の子ができたのだからね、悲観してしまふ。うっちゃって置いて

もいいのだけれど、そももできないことだね、親であつて見ればね。京へ呼び寄せてあなたに見せてあげましょう。憎んではいけませんよ」

「いつも私がそんな女であるとしてあなたに言われるかと思うと私自身もいやになります。けれど女が恨みやすい性質になるのはこんなことばかりがあるからなのでしょう」

と女によおう王うらは怨うらんだ。

「そう、だれがそんな習慣をつけたのだろう。あなたは実際私の心持ちをわかつてしてくれない。私の思っていないことを付そんた度くして恨んでいるから私としては悲しくなる」

と言っているうちに源氏は涙ぐんでしまった。どんなにこの人

が恋しかつたらうと別居時代のことを思つて、おりおり書き合つた手紙にどれほど悲しい言葉が盛られたものであらうと思ひ出していた源氏は、明石の女のことなどはそれに比べて命のある恋愛でもないと思われた。

「子供に私が大騒ぎして使いを出したりしているのも考えがあるからですよ。今から話せばまた悪くあなたが取るから」

とその話を続けずに、

「すぐれた女のように思つたのは場所のせいだったと思われる。とにかく平凡でない珍しい存在だと思ひましたよ」

などと子の母について語つた。別れの夕べに前の空を流れた塩焼きの煙のこと、女の言つた言葉、ほんとうよりも控え目な女の

容貌ようぼうの批評、名手らしい琴の弾ひきようなどを忘れぬふうふうに源氏の語るのを聞いている女王は、その時代に自分は一人でどんなに寂しい思いをしていたことであろう、仮にもせよ良人おっとは心を人に分けていた時代にと思うと恨めしくて、明石の女のために歎たんそ息くをしてくいる良人は良人であるというように、横のほうを向いて、

「どんなに私は悲しかったろう」

歎息しながら独ひとりごと言ことのようようにここう言いつてから、

思ふどち靡なびく方かたにはあらずとも我われぞ煙けむりに先立ちなまし



「何ですって、情けないじゃありませんか、

たれにより世をうみやまに行きめぐり絶えぬ涙に浮き沈む身  
ぞ

そうまで誤解されては私はもう死にたくなる。つまりぬことで  
人の感情を害したくないと思うのも、ただ一つの私の願いのあな  
たと永く幸福でいたいたためじゃないのですか」

源氏は十三絃の掻き合わせをして、弾けと女王に勧めるのであ  
るが、名手だと思つたと源氏に言われている女がねたましいか手  
も触れようとしなない。おおようで美しく柔らかい気持ちの女性で

あるが、さすがに嫉妬しつとはして、恨むことも腹を立てることもあるのが、いつそう複雑な美しさを添えて、この人をより引き立てて見せることだと源氏は思っていた。

五月の五日が五十日いなかの祝いにあたるであろうと源氏は人知れず数えていて、その式が思いやられ、その子が恋しくてならないのであった。紫の女王に生まれた子であったなら、どんなにはなやかにそれらの式を自分で行なつてやったことであろうと残念である。あの田舎いなかで父のいぬ場所で生まれるとは憐あわれな者であると思つていた。男の子であれば源氏もこうまでこの事実じじつに苦しまなかつたであろうが、後の望みきこきを持つてよい女の子にこの引け目をつけておくことが堪えられないように思われて、自分の運はこの一

点で完全でないときえ思った。五十日いのためかに源氏は明石へ使いを出した。

「ぜひ当日着くようにして行け」

と源氏に命ぜられてあつた使いは五日に明石へ着いた。華奢かしやな祝品の数々のほかには実用品も多く添えて源氏は贈つたのである。

海松や時ぞともなきかげにゐて何のあやめもいかにわくらんからだから魂が抜けてしまうほど恋しく思います。私はこの苦しみに堪えられないと思う。ぜひ京へ出て来ることにしてください。こちらであなたに不愉快な思いをさせることは断じてな

い。

という手紙であつた。入道は例のように感激して泣いていた。

源氏の出立の日の泣き顔とは違つた泣き顔である。明石でも式の用意は派手<sup>はで</sup>にしてあつた。見て報告をする使いが来なかつたなら、それがどんなに晴れをしなかつたことだろうと思われた。乳母<sup>めのと</sup>も明石の君の優しい氣質に馴染<sup>なじ</sup>んで、よい友人を得た氣になつて、京のことは思わずに暮らしていた。入道の身分に近いほどの家の女<sup>むすめ</sup>もここに来て女房勤めをしているようなのが幾人かはあるが、それがどうかといえば京の宮仕えに磨<sup>す</sup>り尽くされたような年配の者が生活の苦から脱<sup>のが</sup>れるために田舎<sup>いなか</sup>下りをしたのが多いのに、この乳母はまだ娘らしくて、しかも思い上がった心を持っていて、

自身の見た京を語り、宮廷を語り、しんしん縉紳の家の内部の派手な様子を語って聞かせることができた。源氏の大臣がどれほど社会から重んぜられているかということも、女心にしたいだけの誇張もして始終話した。乳母の話から、その人が別れたのちの今日までも好意を寄せて、また自分の生んだ子を愛してくれているのは幸福でなくて何であろうと明石の君はようやくこのごろになって思うようになった。乳母は源氏の手紙をいっしょに読んでいて、人間にはこんなに意外な幸運を持っている人もあるのである、みじめなのは自分だけであると悲しまれたが、乳母はどうしているかということも奥に書かれてあつて、源氏が自分に関心を持っていることを知ることができたので満足した。返事は、

数ならぬみ島がくれに鳴く鶴たづを今日もいかにと訪とふ人ぞなき  
いろいろに物思いをいたしながら、たまさかのおたよりを命に  
しておりますのものはかない私でございます。仰せのように子供  
の将来に光明を認めとうございます。

というので、信頼した心持ちが現われていた。何度も同じ手紙  
を見返しながら、

「かわいいそうだ」

と長く声を引いて独ひとりごと言ことを言っているのを、夫人は横目にな  
がめて、「浦より遠をちに漕こぐ船の」（我よそをば他に隔へてつるかな）と

低く言つて、物思わしそうにしていた。

「そんなにあなたに悪く思われるようにまで私はこの女を愛しているのではない。それはただそれだけの恋ですよ。その風景が目に見えかねてきたりする時々、私は当時の気持ちになつてね、つい歎息たんそくが口から出るのですよ。なんでも気にするのですね」

などと、恨みを言いながら上包みに書かれた字だけを見せた。品のよい手跡で貴女きじよも恥ずかしいほどなのを見て、夫人はこうだからであると思つた。

こんなふうはなちるさとに紫の女王によおうの機嫌きげんを取ることにばかり追われて、花散里はなちるさとを訪ねる夜も源氏の作られないのは女のためにかわいそうなことである。このごろは公務も忙しい源氏であつた。外出に

従者も多く従えて出ねばならぬ身分の窮きゆうくつ 屈まきもある上に、花散里その人がきわだつ刺戟しげきも与えぬ人であることを知っている源氏は、今日逢わねばと心の湧わき立つこともないのであつた。

五月雨さみだれのころは源氏もつれづれを覺えたし、ちようど公務も閑ひ暇まであつたので、思い立つてその人の所へ行つた。訪ねては行かないでも源氏の君はこの一家の生活を保護することを怠なげつていなかったのである。それにたよっている人は恨むことがあつても、ただみずからの薄命なげを歎なげく程度のものであつたから源氏は氣樂なげに見えた。何年かのうちに邸やしきうち内うちはいよいよ荒れて、すごいような広い住居すまいであつた。姉の女御にようしの所で話をしてから、夜がふけたあとで西の妻戸おぼをたたいた。朧おぼろな月のさし込む戸口えんから艶えんな姿



で源氏はいって来た。美しい源氏と月のさす所に出ていることは恥ずかしかつたが、初めから花散里はそこに出ているのでそのままいた。この態度が源氏の気持ちを楽しにした。水鶏くいなが近くで鳴くのを聞いて、

水鶏だに驚かさずばいかにして荒れたる宿に月を入れまし

なつかしい調子で言うともなくこう言う女が感じよく源氏に思われた。どの人にも自身を惹ひく力のあるのを知って源氏は苦しかった。

「おしなべてたたく水鶏に驚かばうはの空なる月もこそ入れ

私は安心してられない」

とは言っていたが、それは言葉の戯れであつて、源氏は貞淑な花散里を信じ切っている。何に動揺することもなく長く留守るすの間を静かに待っていてくれた人を、源氏はおろそかには思っていない。かつた。当分悲しくならないがために空はながめないで暮らすようにと、行く前に源氏が言った夜のことなどを思い出して言うのであつた。

「なぜあの時に私は非常に悲しいことだと思つたのでしょうか。私などはあなたに幸福の帰つて来た今だつてもやはり寂しいのでし

たのに」

と恨みともなしにおおように言っているのが可憐かれんであつた。例のように源氏は言葉を尽くして女を慰めていた。平生どうしまつてあつたこの人の熱情かと思われるようである。こんな機会がまた作られたならば、大弐だいにの五節ごせちに逢いたいと源氏は願つていたが、五節の訪問も実現がむずかしいと見なければならぬ。女は源氏を忘れることができないで、物思いの多い日を送つていて、親が心配してかれこれと勧める結婚話には取り合わずに、人並みの女の幸福などはいらぬと思つていた。源氏は東の院は本邸でなく、そんな人たちを集めて住ませようと建築をさせているのであつたから、もし理想どおりにかしずき娘ができてくることがあつたら、

顧問格の女として才女の五節などは必要な人物であると源氏は思っていた。東の院はおもしろい設計で建てられているのである。近代的な生活に適するような明るい家である。地方官の中のよい趣味を持つ一人一人に殿舎をわり当てにして作らせていた。

源氏は今もないしのかみ尚侍を恋しく思っていた。懲りたことのない人のように、また危いことあぶなもしかねないほど熱心になっているが、環境のために恋には奔放な力を見せた女もつつましくなっていて、昔のように源氏の誘惑に反響を見せるようなこともない。源氏は自身の地位ができて世の中が窮屈になり、冷たいものになり、物足りなくなつたと感じていた。

院は暢気のんきにおなりあそばされて、よく好きの音楽の会などを

あそばして風流に暮らしておいでになった。女御にょごも更衣こういも御在位の時のままに侍しているが、東宮の母君の女御だけは、以前取り立てて御寵ちようあい愛あいがあつたというのではなく、尚侍にけおされた後宮の一人に過ぎなかつたが、思いがけぬ幸福に恵まれた結果になつて、一人だけ離れて御所の中の東宮の御在所に侍しているのである。源氏の現在の宿直所とのいどころもやはり昔の桐壺きりつぼであつて、梨な壺しつぽに東宮は住んでおいでになるのであつたから、御近所であるために源氏はその御殿とお親しくして、自然東宮の御後見もするようになつた。

入道の宮をまた新たに御母后ごぼこうの位にあそばすことは無理であつたから、太上天皇に準じて女院にょいんにあそばされた。封国が決まり、

院司の任命があつて、これはまた一段立ちまさつたごりつばなお身の上と見えた。仏法に係した善行功德をお営みになることを天職のように思おほしめ召して、精励しておいでになった。長い間御所への出入りも御遠慮しておいでになったが、今はそうでなく自由なお気持ちで宮中へおはいりになり、お出でになりあそばすのであつた。皇太后は人生を恨んでおいでになった。何かの場合に源氏はこの方にも好意のある計らいをして敬意を表していた。太后としてはおつらいことであろうとささやく者が多かつた。兵部ひょうぶ卿う親王は源氏の官位剥奪はくだつ時代に冷淡な態度をお見せになつて、ただ世間の聞こえばかりをはばかり、御娘に対してもなんらの保護をお与えにならなかつたことで、当時の源氏は恨めしい思い

をさせられて、もう昔のように親しい御交際はしていなかった。一般の人にはあまねく慈悲を分かとうとする人であったが、兵部卿の宮一家にだけはやや復讐ふくしゅう的な扱いもするのを、入道の宮は苦しく思召された。現代には二つの大きな勢力があつて、一つは太政大臣、一つは源氏の内大臣がそれで、この二人の意志で何事も断ぜられ、何事も決せられるのであつた。権中納言の娘がその年の八月に後宮へはいった。すべての世話は祖父の大臣がしてはなやかな仕度したくであつた。兵部卿親王も第二の姫君を後宮へ入れる志望を持つておいでになつて、大事にお傳かずきになる評判のあるのを、源氏はその姫君に光榮あれとも思われないのであつた。源氏はまたどんな人を後宮へ推薦しようとしているかそれは

わからない。

この秋に源氏は住吉詣すみやしもうでをした。須磨すま、明石あかしで立てた願がんを神へ果たすためであつて、非常な大がかりな旅になった。廷臣たちが我も我もと随行を望んだ。ちようどこの日であつた、明石の君が毎年の例で参詣さんけいするのを、去年もこの春も障さわりがあつて果たすことのできなかつた謝罪も兼ねて、船で住吉へ来た。海岸のほうへ寄つて行くと華美な参詣の行列が寄進する神宝を運び続けて来るのが見えた。衆人とつら、十列とつらの者もきれいな男を選んであつた。

「どなたの御参詣なのですか」

と船の者が陸へ聞くと、

「おや、内大臣様の御願ごがんはたしの御参詣を知らない人もあるね」



ともおとこ  
 供 男

階級の者もこう得意そうに言う。何とした偶然であるう、ほかの月日もないようにと明石の君は驚いたが、はるかに恋人のはなばなしさを見ては、あまりに懸隔のありすぎるわが身上であることを痛切に知って悲しんだ。さすがによそながら巡り合うだけの宿命につながれていることはわかるのであったが、笑つて行つた侍さえ幸福に輝いて見える日に、罪障の深い自分は何も知らずに来て恥ずかしい思いをするのであろうと思ひ続けると悲しくばかりなつた。深い緑の松原の中に花紅葉もみじが撒まかれたように見えるのは袍ほうのいろいろであつた。赤袍は五位、浅葱あせぎは六位であるが、同じ六位も蔵人くらうどは青色で目に立つた。加茂の大神を恨んだ右近丞うこんのじょうは軛負ゆぎえになつて、隨身をつれた派手はでな蔵人になつ

て来ていた。良清よしきよも同じ鞍負ゆぎえのすけ佐になつてはなやかな赤袍の一人であつた。明石に来ていた人たちが昔の面影とは違つたはなやかな姿で人々の中に混じつてゐるのが船から見られた。若い顯官たち、殿上役人が競うように凝つた姿をして、馬や鞍くらにまで華奢かしやを尽くしている一行は、田舎いなかの見物人の目を楽しませた。源氏の乗つた車が来た時、明石の君はきまり悪さに恋しい人をのぞくことができなかつた。河原かわらの左大臣の例で童形どうぎようの儀仗ぎじようの人を源氏は賜わつてゐるのである。それらは美しく装うていて、髪は分けて二つの輪のみずらを紫のぼかしの元結いでくくつた十人は、背たけもそろつた美しい子供である。近年はあまり許される者がない珍しい隨身である。大臣家で生まれた若君は馬に乗せられて

いて、一班そろずつを揃いえの衣い裳しやうにした幾班かの馬わ添らい童わがつけられてある。最高の貴族の子供というものはこうしたものであるというように、多数の人から大事に扱われて通つて行くのを見た時、明石の君は自分の子も兄弟でいながら見る影もなく扱われていると悲しかった。いよいよ御みや社しろに向いて子のために念じていた。

摂津守が出て来て一行を饗きやう 応おうした。普通の大臣の参さん詣けいを扱うのとはおのずから違つたことになるのは言うまでもない。明石の君はますます自分がみじめに見えた。

こんな時に自分などが貧弱な御みてぐら幣へいを差し上げてても神様も目にとどめにならぬだろうし、帰つてしまうこともできない、今日は浪速なにわのほうへ船をまわして、そこで祓はらいでもするほうがよいと思

つて、明石の君の乗った船はそつと住吉を去つた。こんなことを源氏は夢にも知らないでいた。夜通しいろいろの音楽舞樂をひろま前にえ催して、神の喜びたもうようなことをし尽くした。過去の願れみつに神へ約してあつた以上のことを源氏は行なつたのである。惟こ光などという源氏と辛苦をともした人たちは、この住吉の神の徳を偉大なものと感じていた。ちよつと外へ源氏の出て来た時にこれみつ惟光が言つた。

住吉の松こそものは悲しけれ神代のことをかけて思へば

源氏もそう思つていた。

「荒かりし浪なみのまよひに住吉の神をばかけて忘れやはする

確かに私は靈驗を見た人だ」

と言う様子も美しい。こちらの派手はでな参詣ぶりに畏縮いしゆくして明

石の船が浪速のほうへ行つてしまったことも惟光が告げた。その

事実を少しも知らずにいたと源氏は心で憐あわれんでいた。初めのこと

も今日のこととも住吉の神が二人を愛しての導きに違いないと思われて、手紙を送つて慰めてやりたい、近づいてかえつて悲しませただことであろうと思つた。住吉を立てから源氏の一行は海岸の風光を愛しながら浪速に出た。そこでは祓いをする事になつて

いた。淀川よどの七瀬に祓いの幣が立てられてある堀江のほとりをながめて、「今はた同じ浪速なる」（身をつくしても逢はんとぞ思ふ）と我知らず口に出た。車の近くから惟光が口ずさみを聞いたのか、その用があらうと例のように懷中に用意していた柄の短い筆などを、源氏の車の留められた際に提供した。源氏は懷紙に書くのであつた。

みをつくし恋ふるしるしにここまでめぐり逢ひける縁えには深  
しな

惟光に渡すと、明石へついで行つていた男で、入道家の者と心

安くなっていた者を使いにして明石の君の船へやった。派手な一行が浪速を通つて行くのを見ても、女は自身の薄倅はっしょうさばかりが思われて悲しんでいた所へ、ただ少しの消息ではあるが送られて来たことで感激して泣いた。

数ならでなにはのこともかひなきに何みをつくし思ひ初そめけん

田蓑島たみのじまでの祓はらいの木綿ゆうにつけてこの返事は源氏の所へ来たのである。ちようど日暮れになっていた。夕方の満潮時で、海べにつるいる鶴も鳴き声を立て合つて身にしむ気が多くすることから、人

目を遠慮していずに逢いに行きたいとさえ源氏は思った。

露けさの昔に似たる 旅たびごろも衣たみの田蓑の島の名には隠れず

と源氏は歌われるのであった。遊覧の旅をおもしろがっている人たちの中で源氏一人は時々暗い心になった。高官であつても若い好奇心に富んだ人は、小船を漕こがせて集まつて来る遊女たちに興味を持つふうを見せる。源氏はそれを見てにがにがしい気になつていた。恋のおもしろさも対象とする者に尊敬すべき価値が備わつていなければ起こつてこないわけである。恋愛というほどのことではなくても、軽薄な者には初めから興味が持てないわけで



あるのにと思つて、彼女らを相手にはしやいでいる人たちを軽蔑けいべつした。

明石の君は源氏の一行が浪速なにわを立つた翌日は吉日でもあつたから住吉へ行つて御幣みてぐらを奉つた。その人だけの願も果たしたのである。郷里へ歸つてからは以前にも増した物思いをする人になつて、人数ひとかずでない身の上を歎なげき暮らしていた。もう京へ源氏の着くころであろうと思つてから間もなく源氏の使いが明石へ来た。近いうちに京へ迎えたいという手紙を持つて来たのである。頼もしいふうふうに恋人の一人として認められている自分であるが、故郷を立つて京へ出たのちにまで源氏の愛は変わらずに続くものであろうかと考えられることによつて女は苦しんでいた。入道も手も

とから娘を離してやることは不安に思われるのであるが、そうかといつてこのまま田舎に置くことも悲惨な気がして源氏との関係が生じなかつた時代よりもかえつて苦勞は多くなつたようであつた。女からは源氏をめぐるまぶしい人たちの中へ出て行く自信がなくて出京はできないという返事をした。

この御代みよになつた初めに齋宮もお変わりになつて、六条の御みやす息所どころは伊勢いせから歸つて来た。それ以来源氏はいろいろと昔以上の好意を表しているのであるが、なお若かつた日すらも恨めしい所のあつた源氏の心のいわば余炎ほどの愛を受けようとは思わな  
い、もう二人に友人以上の交渉があつてはならないと御息所は決  
めていたから、源氏も自身で訪ねて行くようなことはしないので

ある。しいて旧情をあたためることに同意をさせても、自分ながらもまた女を恨めしがらせる結果にならないとは保証ができないというように源氏は思っていたし、女の家へ通うことなども今では人目を引くことが多くなっていることでもあつて、待つと言わない人をしいて訪ねて行くことはしなかつた。齋宮がどんなにりっぱな貴女きじよになつておいでになるであらうと、それを目に見たく思っていた。御息所は六条の旧邸をよく修繕してあくまでも高雅なふうに暮らしていた。洗練された趣味は今も豊かで、よい女房の多い所として風流男の訪問が絶えない。寂しいようではあるが思ひ上がった貴女にふさわしい生活であると思えたが、にわかには重い病氣になつて心細くなつた御息所は、伊勢という神の境にあ

つて仏教に遠ざかつていた幾年かのことが恐ろしく思われて尼になつた。源氏は聞いて、恋人として考えるよりも、首肯される意見を持つよき相談相手と信じていたその人の生命いのちが惜しまれて、驚きながら六条邸を見舞つた。源氏は真心から御息所をいたわり、御息所を慰める言葉を続けた。病床の近くに源氏の座があつて、御息所は脇きょうそく息きに倚りかかりながらものを言つていた。非常に衰弱の見える昔の恋人のために源氏は泣いた。どれほど愛していたかをこの人に実証して見せることができないまままで死別をせねばならぬかと残念でならないのである。この源氏の心が御息所に通じたらしくて、誠意の認められる昔の恋人に御息所は齋宮のこゝとを頼んだ。

「孤児になるのでございますから、何かの場合に子の一人と思ってお世話をしてくださいませ。ほかに頼んで行く人はだれもない心細い身の上なのです。私のような者でも、もう少し人生というものわかる年ごろまでついてあげたかったです」

こう言ったあとで、そのまま気を失うのではないかと思われるほど御息所は泣き続けた。

「あなたのお言葉がなくてもむろん私は父と変わらない心で齋宮を思っているのですから、ましてあなたが御病中にもこんな心配になって私へお話しになることは、どこまでも責任を持つてお受け合います。気がかりになどは少しもお思いになることはありませんよ」

などと源氏が言うつと、

「でもなかなかお骨の折れることでございますよ。あとを頼まれた人がほんとうの父親であつても、それでも母親のない娘は心細いことだろうと思われまますからね。まして恋人の列になどお入れになつては、思わぬ苦勞をすることでしょうし、またほかの方を不快にもさせることだろうと思います。悪い想像ですが決してそんなふうにお取り扱いにならないでね。私自身の経験から、あの人は恋愛もせず一生処女でいる人にさせたいと思います」

御息所はこう言つた。意外なそんたく村度そんたくまでもするものであると思つたが源氏はまた、

「近年の私がどんなにまじめな人間になつてゐるかをご存じでし

よう。昔の放縦な生活の名残なごりをとどめているようにおっしやるのが残念です。自然おわかりになつてくることでしようが」

と言つた。もう外は暗くなつていた。ほのかな灯影ほかげが病牀びようじょう

の几帳きちようをとおしてさしていたから、あるいは見えることがある

うかと静かに寄つて几帳の綻ほころびからのぞくと、明るくはない光の

中に昔の恋人の姿があつた。美しくはなやかに思われるほどに切

り残した髪が背にかかつていて、脇息によつた姿は絵のようであ

つた。源氏は哀れでたまらないような気がした。帳台の東寄りの

所で身を横たえている人は前齋宮でおありになるらしい。几帳の

垂たれ絹が乱れた間からじつと目を向けていると、宮は頬杖ほおづえをつ

いて悲しそうにしておいでになる。少ししか見えないのであるが

美人らしく見えた。髪のかかりよう、頭の形などに気高い美が備わりながらまた近代的なはやかな愛嬌のある様子もわかった。御息所があんなに阻止的に言っているのであるからと思つて、源氏は動く心をおさえた。

「私はとてもまた苦しくなつてまいりました。失礼でございませうからもうお帰りくださいませ」

と御息所は言つて、女房の手を借りて横になつた。

「私が伺つたので少しでも御気分がよくなればよかつたのですが、お気の毒ですね。どんなふうにも苦しいのですか」

と言いながら、源氏が牀をのぞこうとするので、御息所は女房に別れの言葉を伝えさせた。



「長くおいでくださいましては物ものの怪けの来ている所でございますからお危あぶうございます。病氣のこんなに悪くなりました時分に、おいでくださいましたことも深い御因縁のあることとうれしく存じます。平生思っておりましたことを少しでもお話のできましたことで、あなたは遺族にお力を貸してくださいさるでしょうと頼もしく思われます」

「大事な御遺言を私にしてくださいましたことをうれしく存じます。院の皇女がたはたくさんいらつしやるのですが、私と親しくしてくださいます方はあまりないのですから、齋宮を院が御自身の皇女の列に思おほしめ召おほしめされましたとおりに私も思ひまして、兄弟として睦むつまじくいたしましょう。それに私はもう幾人もの子があつ

てよい年ごろになつて居るのですから、私の物足りなさを齋宮は補つてくださるでしょう」

などと言ひ置いて源氏は歸つた。それから源氏の見舞いの使いが以前よりもまた繁しげしげ々行つた。そうして七、八日のちに御息所は死んだ。無常の人生が悲しまれて、心細くなつた源氏は参内もせず引きこもつていて、御息所の葬儀についての指図さしずを下しなどしていた。前の齋宮司の役人などで親しく出入りしていた者などがわずかに来て葬式の用意に奔走するにすぎない六条邸であつた。侍臣を送つたあとで源氏自身も葬家へ来た。齋宮に弔詞を取り次がせると、

「ただ今は何事も悲しみのためにわかりませんので」

と女別当によべつとうを出してお言わせになった。

「私に御遺言をなすつたこともありませんから、ただ今からは私を睦むつまじい者と思おぼしめ召してくださいましたら幸しあわせです」

と源氏は言つてから、宮家の人々を呼び出していろいろするこ  
とを命じた。非常に頼もしい態度であつたから、昔は多少恨めし  
がつていた一家の人々の感情も解消されていくようである。源氏  
のほうから葬儀員が送られ、無数の使用人が来て御息所の葬儀は  
きらやかに執行されたのであつた。

源氏は寂しい心を抱いて、昔を思いながら居間の御簾みすを下ろし  
こめて精進の日を送り仏勤めをしていた。前齋宮へは始終見舞い  
の手紙を送っていた。宮のお悲しみが少し静まってきたころから

は御自身で返事もお書きになるようになった。それを恥ずかしく思召すのであったが、乳母めのとなどから、

「もつたいたないことでございますから」

と言つて、自筆で書くことをお勧められになるのである。雪が霰みぞれとなり、また白く雪になるような荒日あればより和なに、宮がどんなに寂しく思つておいでになるであろうと想像をしながら源氏は使いを出した。

こういう天気の日にどういふお気持ちでいられますか。

降り乱れひまなき空に亡なき人の天あまがけるらん宿ぞ悲しき

という手紙を送ったのである。紙は曇った空色のが用いられてあつた。若い人の目によい印象があるようにと思つて、骨を折つて書いた源氏の字はまぶしいほどみごとであつた。宮は返事を書きにくく思召したのであるが、

「われわれから御挨拶あいさつをいたしますのは失礼でございますから」と女房たちがお責めするので、灰色の紙の薫くんこう香のにおいを染ませた艶えんなのへ、目だたぬような書き方にして、

消えがてにふるぞ悲しきかきくらしわが身それとも思ほえぬ  
世に

とお書きになった。おとなしい書風で、そしておおようと、すぐれた字ではないが品のあるものであつた。齋宮になつて伊勢へお行きになつたところから源氏はこの方に興味を持っていたのである。もう今は忌垣いがきの中の人でもなく、保護者からも解放された一人の女性と見てよいのであるから、恋人として思う心をささやいてよい時になつたのであると、こんなふうに思われるのと同時に、それはすべきでない、おかわいそうであると思つた。御息所がその点を気づかっていたことでもあるし、世間もその疑いを持って見るであろうことが、自分は全然違つた清い扱いを宮にしよう、陛下が今少し大人らしくものを認識される時を待つて、前齋宮を後宮に入れよう、子供が少なくて寂しい自分は養女をかしづくこ

とに楽しみを見いだそうと源氏は思いついた。親切に始終尋ねの手紙を送っていて、何かの時には自身で六条邸へ行きもした。

「失礼ですが、お母様の代わりと思つてくださつて、御遠慮のないおつきあいをくださつたら、私の真心がわかつていただけたいという気がするでしょう」

などと言うのであるが、宮は非常に内気で羞恥心しゆうちがお強くて、異性にほのかな声でも聞かせることは思いもよらぬことのようにお考えになるのであつたから、女房たちも勧めかねて、宮のおとなしさを苦勞にしていた。女別当によべつとう、内侍ないし、そのほか御親戚関係の王家の娘などもお付きしているのである。自分の心に潜在している望みが実現されることがあつても、他の恋人たちの中に混じ

つて劣る人ではないらしいこの人の顔を見たいものであると、こんなことも思っている源氏であつたから、養父として打ちとけな  
い人が聡<sup>そうめい</sup>明であつたのであろう。自身の心もまだどうなるか  
れないのであるから、前齋宮を入<sup>じゆだい</sup>内させる希望などは人に言  
ておかぬほうがよいと源氏は思っていた。故人の仏事などにとり  
わけ力を入れてくれる源氏に六条邸の人々は感謝していた。

六条邸は日がたつにしたがつて寂しくなり、心細さがふえてく  
る上に、御息所<sup>みやすどころ</sup>の女房なども次第に下がって行く者が多くなつ  
て、京もずつと下<sup>しも</sup>の六条で、東に寄つた京極通りに近いのである  
から、郊外ほどの寂しさがあつて、山寺の夕べの鐘の音にも齋宮  
の御涙は誘われがちであつた。同じく母といつても、宮と御息所



は親一人子一人で、片時離れることもない十幾年の御生活であつた。齋宮が母君とごいつしよに行かれることはあまり例のないことであつたが、しいてごいつしよにお誘いになつたほどの母君が、死の道だけはただ一人でおいでになつたとお思ひになることが、齋宮の尽きぬお悲しみであつた。女房たちを仲介にして求婚をする男は各階級に多かつたが、源氏は乳母めのとたちに、

「自分勝手なことをして問題を起こすようなことを宮様にしてはならない」

と親らしい注意を与えていたので、源氏を不快がらせるようなことは慎まねばならぬとおのおの思ひもし諫いさめ合いもしているのである。それで情実のためにどう計らおうというようなことも皆

はしなかつた。院は宮が齋宮としてお下りになる日の莊嚴だった  
大極殿だいごくでんの儀式に、この世の人とも思われぬ美貌びぼうを御覧になつた  
時から、恋しく思召されたのであつて、帰京後に、

「院の御所へ来て、私の妹の宮などと同じようにして暮らしては」  
と宮のことを、故人の御息所へお申し込みになつたこともある  
のである。御息所のほうでは院に寵ちようき姫が幾人も侍している中へ、  
後援者らしい者もなくて行くことはみじめであるし、院が始終御  
病身であることも、母の自分と同じ未亡人の悲しみをさせる結果  
になるかもしれぬと院参を躡ちゆうちよ躡ちゆうちよしたものであつたが、今にな  
つてはましてだれが宮のお世話をして院の後宮へなどおはいりに  
なることができようと女房たちは思っているのである。院のほう

では御熱心に今なおその仰せがある。源氏はこの話を聞いて、院が望んでおいでになる方を横取りのようにして宮中へお入れすることは済まないと思つたが、宮の御様子がいかにも美しく可憐かれんで、これを全然ほかの所へ渡してしまうことが残念な氣になつて、入道の宮へ申し上げた。こんな隠れた事實があつて決断ができないということをお話した。

「お母様の御息所はきわめて聡明そうめいな人だったので、私の若氣のあやまちから浮き名を流させることになりました上、私は一生恨めしい者と思われることになったのですが、私は心苦しく思つているのでございます。私は許されることなしにその人を死なせてしまいましたなが、亡なくなりませす少し前に齋宮のことを言い出

したのでございます。私としましては、さすがに聞いた以上は遺言を実行する誠意のある者として頼んで行くのであると思えてうれしゅうございまして、無関係な人でも、孤児の境遇になった人には同情されるものなのですから、まして以前のことをごさいますして、亡くなりましたあとでも、昔の恨みを忘れてもらえるほどのことをしたいと思ひまして、齋宮の将来をいろいろと考えている次第なのですが、陛下もずいぶん大人らしくはなつていらつしやいます。お年からいえばまだお若いのですから、少しお年上の女御によひしが侍していられる必要があるかとも思われるのでございませう。それもしかしながらあなた様がこうするようにと仰せになるのにしたが随わせていただくと思ひます」

と言うと、

「非常によいことを考えてくださいました。院もそんなに御熱心でいらつしやることは、お気の毒なようで、濟まないことかもしれません。お母様の御遺言であつたからということにして、何もお知りにならない顔で御所へお上げになればよろしいでしょう。このごろ院は実際そうしたことには淡泊なお気持ちになつて、仏勤めばかりに気を入れていらつしやるということも聞きますから、そういうことになさいましてもお腹だちになるようなことはないでしょう」

「ではあなた様の仰せが下つたことにしまして、私としてはそれに賛成の意を表したというぐらいのことにいたしておきましょう。

私はこんなに院を御尊敬して、御感情を害することのないようにと百方考えてかかっているのですが、世間は何と批評をいたすことでしょうか」

などと源氏は申ししていた。のちにはまた何事も素知らぬ顔で二条の院へ齋宮を迎えて、入内じゆだいは自邸からおさせしようという気にも源氏はなつた。夫人にその考えを言つて、

「あなたのいい友だちになると思う。仲よくして暮らすのに似合わしい二人だと思ふ」

と語つたので、女によおう王も喜んで齋宮の二条の院へ移つておいでになる用意をしていた。入道の宮は兵部ひようぶきよう卿の宮が、後宮入りを目的にして姫君を教育していられることを知っておいでになる

のであったから、源氏と宮が不和になっている今日では、その姫君に源氏はどんな態度を取ろうとするのであろうと心苦しく思召した。中納言の姫君は弘徽殿こきでんの女御にょごと呼ばれていた。太政大臣の猶子ゆうしになつていて、その一族がすばらしい背景を作っているはなやかな後宮人であつた。陛下もよいお遊び相手のように思召された。

「兵部卿の宮の中なか姫君ひめぎみも弘徽殿の女御と同じ年ごろなのだから、それではあまりお雛ひな様遊びの連中がふえるばかりだから、少し年の行つた女御がついていて陛下のお世話を申し上げることはうれしいことですよ」

と入道の宮は人へ仰せられて、前齋宮の入内の件を御自身の意

志として宮家へお申し入れになつたのであつた。源氏が当帝のために行き届いた御後見をする誠意に御信頼あそばされて、御自身はおからだがお弱いために御所へおはいりになることはあつても、<sup>なが</sup>永くはおとどまりになることがおできにならないで、退出しておしまいになるため、そんな点でも少し大人になつた女御はあるべきであつた。



# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

澁標

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>